「遅れているのは知識だけ」

53 年春、「春男の翔んだ空」を観、その感激にまだひたっていたある日のこと、その映画の脚本から制作までを担当された山田典吾監督と対談しました。

この映画は、北九州市の特殊教育に献身的に取り組んだ野杉春男先生を、俳優ならぬタレントの永六輔氏が演じたものです。特殊学級は東京教育大学附属大塚養護学校が協力して、永六輔氏がその新任の先生として子供たちに臨み、子供たちは永氏を本当の先生と信じてその指導を受け、そこに自然に（つまり、全くの作為なしに）展開される場面を、子供たちに知られない場所に設置された望遠カメラによって撮影したものです。

永氏はこの映画に主演することを決心したことについて、父親の言葉「生きているということは誰かに借りを作ること。生きてゆくということはその借りを返してゆくこと」の「借りたものを返す。それも自分のできる方法で返してゆくことが、この野杉春男先生を演じることなのだ」と語っています。

また、永氏は、この映画に出演する以前から特殊教育に関心を持ち、施設を訪問したり、お手伝いをしてきたりしていて、心身障害児について深い理解を持っていらっしゃる方です。そのことは、「知恵は遅れていない。遅れているのは知識だけだ」、そして「人間を不幸にしてきたのは知識なのだ」、「心身障害というけれど、心は病んでいない。心が病んでいるのは彼ら以外の僕たちだ」という永氏の言葉でよくわかります。

こういう永氏によって野杉春男先生が演じられ、天真爛漫（らんまん）な子供たちは、これを自分たちの本当の新しい先生だと信じている関係から醸（かも）し出される場面の数々は、いかなる名優も及ばないものがありました。

山田監督が、この映画制作を思い立った理由を知ることができるものとして、シナリオの解説書の末尾に次の一文があります。

「養護学校中二の娘美樹は、今でも 1＋1＝2 と答えられない。足し算は何でも“5 です”と答えてしまう。それが多少の言語障害で“5 レス”と聞こえてしまう。だから近所の子は“ゴレス”という怪獣みたいな仇名で呼ぶ。“中学生で 1＋1 もできない。バーカ”と今日もいじめら

れてケガして帰って来た。母親は怒って、そのいじめっ子の家に押しかけたが、“子供の喧嘩に親が出た”と逆ねじをくらって帰って来る。その子の学校に電話をする。“学外のことでありまして、学校といたしましては……”と取り合わない。

地域社会でこの子たちは遊ぶことも許されない。知恵遅れの子がいじめられている姿を見たって、知らぬ顔をしている大人たち……。

そんな大人よ。そんな子らよ。普通児の担任先生、校長先生。“春男の翔んだ空”は、そんなあなた方に是非見て頂くために、わたしは一生懸命に作ったのです。わたしたちに連なる親たちの涙が、フィルムとなって回っております。」

知識を蓄える教育ではなくて、知恵を磨く真の教育を知るためにも、私は「春男の翔んだ空」を一人でも多くの皆さんに観てもらいたいものだと思いました。この映画を観たら、「心身障害というけれど、心は病んでいない。心が病んでいるのは彼ら以外の僕たちだ」という永氏の言葉がよくわかるだろうと思い、醜い心を矯(た)めることに努力してくれる人が増えるのではないかと思います。